

## 第110話<草葉の陰で>の要約と参考資料

### 第110話<草葉の陰で>の要約

終戦 3 か月前、佐藤花恵さんの夫宏さんは硫黄島で玉砕。花恵さんは焼き畑、炭焼きをして、女手一つで 5 人の子を育てあげました。婦人会の集会で戦後体験を話して涙を誘ったことも。「朗らかで、誰とでも話をする」。人知れぬ苦労が豊かな人柄をもたらしたのです。

### 第110話<草葉の陰で>の参考資料

#### 110-1 佐藤金男方の墓

##### 佐藤宏之墓

昭和 20 年 3 月 17 日 硫黄島ノ戦争ニ於テ戦死ス 行年 39 歳

佐藤為三郎ノ四男 佐藤金男ノ父

宏ハ大正 10 年 3 月岩戸小学校高等科卒業后農事ニ従事シ、昭和 3 年 1 月 10 日都城歩兵第 23 聯隊ニ入隊中済南事变ニ参加各地ニ転戦、同 4 年 11 月除隊帰宅後家事ニ励ミカタワラ青年指導員トシテ青年教育ニ専心ス、同 13 年 5 月 24 日歩兵第 23 聯隊ニ応召中支方面ニ派遣サレ各地転戦、同 14 年 7 月 17 日召集解除、同 19 年 2 月西部第 17 部隊ニ応召大東亜戦ニ参加、硫黄島方面ニ派遣サレ、昭和 20 年 3 月 17 日同地ノ戦闘ニ於テ戦死ス。

#### 110-2 硫黄島玉砕

##### 越村敏雄「硫黄島守備隊」p221～225 より

2 月 19 日 6 時ごろ、米輸送船団は大挙して硫黄島南東沖合に進攻した。(それから約 1 か月戦闘が続く；略)

(3 月) 16 日、米軍の包囲の鉄還は、さらに縮まり、17 日夜、栗林兵团長以下兵团司令部と第 27 航空艦隊司令官市丸少将以下の海軍司令部は大本営にあて、次の訣別の電文を發した。(略)

大本営は 3 月 17 日の硫黄島からの訣別電報に基づき、同島の玉砕について 3 月 21 日 12 時次のように發表した (朝日新聞)。

……戦局遂に最後の関頭に直面し「17 日夜半を期し最高指揮官を陣頭に皇国の必勝と安泰とを祈念しつつ全員壮烈なる総攻撃を敢行す」との打電あり、爾後通信絶ゆ。

#### 110-3 佐藤花恵さんの体験

佐藤花恵さんの話（1979年4月14日聴取）

うちの親爺は3回兵隊に行った。いちばん最初は21歳で都城に入隊。そのあと支那事変に行つて負傷して、中支の一線に立たして、山の中で包囲されて20日余りも食べんで、木の柴を食べたりして、ものすごく痩せて帰つてきた。それから19年2月に行つて、20年3月の硫黄島玉砕で戦死じゃった。はがきが11通あつた。「子どもを頼む、子どもを頼む」ちの。最後の葉書は、「(戦場に行くのを) 一時見合わす」。硫黄島に渡つてからは連絡がない。

(戦死の公報が届いたとき) 宏の兄が荒谷の義雄さん。岩戸の土持元生さんが助役しとつたが、直接うちには言うて来きらんで、荒谷の義雄さんが元生さんを連れてきた。そのとき家には、金男（小学校6年生、13歳）しかおらん。わたしは畑仕事しよつたが、金男が「母ちゃん、父ちゃんが……」ち、あとは言葉にならんとよ。泣きながら走つて来たとき、わたしは、なにかすぐわかつた。その場に座り込んでしもうた。畑に出て、仕事を一生懸命しよつたところじゃが、声も出らん。そしたら、あとを元生さんと義雄さんが来た。

召集令状は赤紙たい。公報は口で言うてこらすとたい。なかなか言いにくいものじゃから、兄さんを連れてこらしたもんたい。前の年の2月に行つて、13カ月で戦死の公報。元生さんは「硫黄島で戦死したという知らせがあつた」というだけ。口伝えで、硫黄島は玉砕したと、それから聞いた。海のまん中、逃げ場、隠れ場はない。現役でとられたのは、同じ年齢（鎮男、実雄……）では土呂久で1人。鎮男（三代士の弟）さんはくじのがれで、甲種合格だが、兵隊に呼ばれん。召集もこんとやから。

私とこの主人は、訓練のじょうしとつたちやが、岩戸の青年学校で指導員をして。指導員は、岩戸地区では、土呂久の宏、黒原のマツオ、立宿のアキヨシの3人くらい。生徒を野営に連れて行つたり、鉄砲撃ちの練習したり、演習のまねして、撃つまね、隠れ方、戦争の稽古。軍人勅諭を教えて、国のためなら命もいらんとたたき込む。無報酬ですたい。奉公。くれてもタバコ銭くらい。青年学校は20歳前の生徒を集めて、軍隊の教練をしよつた。指導員しとるときに召集がかかつて、それが最後。

戦死の公報はとつぜんじゃからね。「無事で帰つてくる」と思つて、銃後の守りをしとるとよ一。5人の子どもかかえて、腰元でみな育てた。残つた者は骨折るとよな。あの頃、特別の人でないと、政府の援護もない。月に援護費用は1円40銭。まこつ苦労したわ。

ナバは煙でダメ。炭焼きして鉾山にだしよつた。炭焼きを一人でせなならんごつなつて。戦死したとき、13歳を頭（金男）に4か月のすそ子（八津子）まで子が5人。炭俵、1俵8貫500を2俵、合わせて17貫を孫平からかるうて、やつと人間が通るような2キロの山道を下りよつた。4か月の子どもを帯を掛けて、前に抱いて……。惣見橋のたもとに、要三郎さん（町）の土地を借りて宏さんがつくつた炭小屋があつた。そこにかるうて出しよつた。馬車が来て、笹の都に持つて行つて売りよつた。山からそこまでからい出さんと、運びだせんかつた。苦労したこと、忘れておらんがな。八津子が2つくらいのとき、ナフタリンという布で着物つくつてやつて着せると、仏さんの前で、「父ちゃん、これいいやろ

が」ち見せたのをわすれきらん。私が婦人会長して、400～500 人の前で「草葉の陰で」と（戦後の苦労を）報告したとき、みんなもらい泣きした。

硫黄島生き帰りの佐藤峰喜さんに会いに行ったが、「宏とは硫黄島では会うとらん。わからん」ということじゃった。峰喜さんの話では、支那事変で応召したとき、うちのがよろけしもち、20 日も笹の葉しか食わず、よう歩かん、敷居も越えきらん。金平糖を3つ持とったんでやったが、食べきらんやった、げな。このとき木島部隊だった。

#### 佐藤花恵さんの話（1979年4月14日聴取）

女の子を3年余り奉公に出したつばい。「他人の水を飲ませな」、荒谷に嫁行ってる繁子を寺尾野の甲斐タケオ方に3年3カ月奉公に出した。鞆（あかぎれ）いっばいつくって働きよった。すそ子（八津子）は上寺の金満家とこに奉公に行った。今、広島にいる。

私が婦人会会長をしとるとき、高千穂で、みんなの前で話をしたことがある。子どもが義務教育終えたら、繁子と八津子を奉公に出した。繁子は3年3か月、嫁もらいが始まったけ、荒谷にやった。タケオさん(?)がずいぶん可愛がってくれて、泣き別れだった。八津子は牛の育成とナバで表彰を受けたこともある。よその企業がなかったので、炭鉱に行くほか金取りはなし、奉公に出した。親は金もらう。子は仕込んでもらう。金男と明雄を学校行かせて、繁子がその金をつくる。惣見から孫平にひと山もろたので、煙害でナバがはえず、炭焼き、8貫の炭を2俵ずつ肩にかけて、ひもを首にかけて八津子を抱いて、今朝光さんとこの炭納屋にだしよった。

#### 110-4 佐藤花恵さんの死

##### 佐藤正四さんの話（1980年7月25日電話で）

昨日の晩12時ごろ、金男さんとこの花恵さんが死んだですよ。胸にくもりがあるとかいうて、岩戸の病院に入院して2週間目。家族の付添いもなしに、急に死んだふうじゃった。葬式は26日、午後2時出棺。

##### 佐藤家の法名塔より

明称寿釈尼明恵大姉 俗名花恵

昭和55年7月24日亡 行年68歳

金男 明雄 繁子 久男 八津子ノ母

#### 110-5 花恵さんの長女・佐藤繁子さんの話（2021年6月5日聴取）

おっかさんは5人（金男、明雄、繁子=昭和12年生、久男、八津子）の子育てでえらかった。金男が小さいときに、金畑から仁戸内に降りてきた。ヤボ作でとれるトーキビ、

カライモ、大根やら食べて育った。収入にしたのは炭焼き。久男を背中にかるうて、1俵40キロの炭俵を「町」にあった炭小屋まで運んだ。そこから、馬車の人を取りに来た。学校から帰るとき、友だちと惣見橋のところで別れて、一人で20分くらい小又川沿いの道を歩いた。暗い道を帰りよると、小鳥が泣きながら追いかけてくる。中学卒業して、5月から寺尾野の大きな百姓家（甲斐たけお方）に奉公に出た。初めて田植えをしたとき、足に一杯傷ができた。田んぼのことはなんも知らんき。おっかさんが、嫁に行ったとき困るからと、奉公に行かした。うちに帰るのは、祭りと正月ぐらい。その当時、上寺用水を三面張りにする工事があった。惣見まで、セメントと混ぜる砂利を運んだりした。自分では、苦勞とは思ったことがない。3年半奉公したあと、尊幸さんといっしょになった。

おっかさんは、婦人会の会長をしとったときに高千穂の集まりで話をしたことがあった。涙を流して聞いてくれた、と言っていた。父は3回くらい戦争に行った。父の骨壺には石ころがはいっているだけ。どんな姿で死んだか、何もわからん。トンネルの中で火を付けられて死んだ、という人もあった。

（戦後の亜ヒ焼き窯の）煙を吸うと、「くせえね」ち言うて、口を押えて帰りよった。

#### 110-6 金男さんの長女・渡辺ミヤ子さんの話（2021年6月5日聴取）

花恵さんは、朗らかで、誰とでも話をする。他人の気持ちのわかる人だった。養鱒場を手伝って、客に山菜料理をつくって出していた。宏さんは、「惣見」の四男。花恵さんは「倉」の出。父（金男）は、ヤボを焼いたり、ナバをつくったり、炭を焼いたりしていた。